

西南学院大学 図書館報

No. 38

1968年4月1日発行

福岡市西新町
西南学院大学図書館
編集人 山下和夫

大学図書館の学習的機能

図書館長 坂本重武

大学図書館の機能は学習・研究・総合・保存の4つであると言われる。なかでも、カレッジ・レベル、特に下学年においては、学習が重要な役目を演ずる。この学習を助ける制度として、アメリカではリザーブ・ブックの制度があり、日本では指定図書制度が出来つつある。リザーブ・ブックというのは、学期のはじめに、講義担当の教師が、その講義を聞くものが、かならず参考にしなければならない図書を何冊か指定する。そうすると、図書館ではその図書をリザーブ専用の棚に留保しておく。指定参考書として需要が多いはずだから、できれば副本を備えておく。また、貸出日数も普通の図書とちがって、1日とか、2日に制限する。試験前などには時間単位でしか貸出さない。これは全く、講義を聞く大学生の学習の便宜をはかった制度である。

このリザーブ・ブックの制度が、日本では形を変えて指定図書制度となってきた。指定図書についての考え方も、また、その利用法も、大学によって、いろいろ違っているらしいが、ある国立の大学の図書館長に聞いたところによると、その大学では次のようなやり方でやっているとのことであった。1つの学科目を担当している教師は、その講義の参考図書を5冊まで指定できる。図書館ではその5冊について、その講義を受講している学生数の10分1の冊数を備える。そして、できれば、それをオープンにして利用させる。以上の基準によって文部省から予算がでることである。これも、大学図書館の学習的機能

を十分に発揮させるための1つの制度である。

われわれの新図書館には1階に学習室を設けることになっている。その意義については「大学広報」の第2号に詳しく述べているので、それを参照してもらいたい。この学習室を有効に利用するためには、どうしても指定図書制度が必要になる。今までは、われわれの図書館では、部門別閲覧室制と開架制をとっていたので、指定図書制度はとっておらず、僅かに2・3の教授、特に外人の先生方がリザーブ制をとっていられた位である。しかし、新図書館では学習的機能をより十分に発揮するためには指定図書制度を取り入れたいと思っている。学習室をつくり、学習用の指定図書を備えることによって、「講義1時間に対して、2時間の予習・学習を必要とする」という単位制度を生かす素地だけはできたことになるのである。

告知板

- 新入学生の図書館利用 来たる4月11日(木)12日(金)に新入学生に対する図書館利用のオリエンテーションを行いますから、新入学生はそれを行うしてから利用してください。
- 春休長期貸出の返却期限 4月20日(土)まで
- 卒論特別貸出について 4年次生は卒業論文作成のための特別貸出をうけることができます。冊数は3冊以内、期間は1カ月間です。希望者は係員まで申出てください。

特集

新入生はいかなる本を読むべきか

各教授に聞く

■ キリスト教学 関谷定夫 助教授

本学の教育理念の基調はいうまでもなく、キリスト精神である。全学年にわたって「キリスト教学」なる講座が実施されているゆえんである。

第一学年では聖書入門を学ぶことになっている。それで聖書入門書として適当な書物を若干あげる。①聖書全般については、小塩力「聖書入門」(岩波新書)、新約聖書の概説書としては、オスカー・クルマン(倉田清訳)「新約聖書」(文庫クセジュ、白水社)、旧約聖書については、興祐正敏「旧約各書の読み方」(日本基督教団出版部)が手頃。聖書の思想の面については、北森嘉蔵「聖書入門」(河出新書)、歴史的面からは、現地イスラエルの発掘に従事したことのある赤司道雄の「聖書」(中公新書)が面白い。聖書の成立過程については、A・レップレ(増田和宣訳)「聖書の世界」(山本書店)が好適。②イエスについて書かれたものとしては、高橋虔「イエスの生涯と思想」(教文館)、特に歴史家の立場から書かれた土井正興「イエス・キリスト」(三一書房)は読みごたえがある。少し分量は多いが、聖書学的なほば広い見地から試みられたパークレー(大島良雄訳)「イエスの生涯」I、II(新教出版社)は興味つきない好読み物。③次に聖書の本質理解のために不可欠な聖書の背景を知るのに恰好の参考書として、三笠宮崇仁の「帝王と民衆—オリエントのあけぼの—」(カッパブックス、光文社)及び「大世界史—ここに歴史はじまる—」(文芸春秋社)をぜひ読みたい。次にさらに旧約聖書の理解のために必要なイスラエル民族史について、村松剛「ユダヤ人」(中公新書)は現代イスラエルにいたるユダヤ四千年の歩みを明快に説いた好著。また旧約聖書の時代史としては、オーソンスキー(小林正之訳)「偶像への挑戦」(原名は「古代イスラエル」)をすすめた。さらに新約聖書時代史としては、マルセル・シモン(久米博訳)「原始キリスト教」(文庫クセジュ、白水社)を特にすすめた。また最近とみに発達し来た聖書考古学の入門書として、さきにあげた三笠宮の二著以外に、E・キエラ(飯倉勝正訳)「粘土に書かれた歴史」(岩波新書)が興味深い読み物。これと関連して二十世紀最大の発見といわれる「死海文書」の入門書として、

E・M・ラペルーザ(野沢協訳)「死海写本」(文庫クセジュ、白水社)、他はH・H・ローリー(関谷定夫訳編)「死海巻物と聖書」(ヨルダン社)がある。④そのほか特に文学部の学生にすすめたい同題名の書物が2冊ある。斎藤勇「文学としての聖書」(研究社)とトロウィク(吉田新一訳)の「文学として聖書」(開文社)である。

■ 数 学 武田 雄一 講師

数学に現在ほど関心をもたれている時代はない。一般的に数学は無味乾燥な数の計算とか入学試験用の数学を思い出させる。本学では幸い入試に数学が課せられておらず、従って嫌悪感をもよおす様な入学試験用数学(これをAと定義する)に拘束されていない。入試用の数学は範囲が限られていることと、入学者選抜目的のため学問としての数学本来のかたちをかなり歪曲している。この意味で本人に意図と論理的思考能力がありさえすればAから解放された自由な立場で数学の本を読むことができる。

数学は互に関連はあるが二つの顔を持っている。一つは物理学や工学あるいは社会科学等に応用面で研究され発展した領域で、例えば今では古典となった微積分学から発展していった応用解析学や線型計画法など計画数学などである。二つは数学それ自体自己内で研究発展した純粋数学とよばれる分野である。これはへんな喩えであるが囲碁が囲碁だけで発展しているのに似ている。現代代数学とかトポロジーとか多様体論等で公理的な数学である。本来、数学は論理であるのは周知であるが、数学を苦手と思う原因の一つは自然科学の一分科とばかり思い込んだり、数学の内容が公理主義に基づくことを最初から念頭に置いてないことによるものと確信する。数学の本質は公理主義による抽象論理の構築物であるが、理解させようとする著者の親切心により俗感的要素を織り込んでいるのを、読者がこれを思考選別せず、織り込みを混乱に変えながら読むので、遂に誤解し嫌気が出てくると私は思う。

新入生諸君は各人、志や抱負が異なるのは当然であるが、自分が少なくとも多様性のある広い思考や思惟の旅に出てみたいと思うなら、Aには解放され実利面に拘泥

せず現代数学の概説的なものやトポロジーまたは位相数学、行列論、ベクトル解析等なにを讀んでもよい。とかく意欲ある青年の癖として、むづかし過ぎるものに取り付く傾きがあるが、上述の意味で理解し得るもので余り古くないものから読むことを勧める。

■ 英 語

大森 衛 助教授

大学における英語の占める比重は軽くない。幸いにして英語は中学以来すでに数年学ばれて来ているはずであり、加えて新1年生は2年間で10単位を必修することになるのだが、従来例から見ると、学部を問わず、専門書を英語で読まされる段階になると必ずしも学力が充分ついているとは言い難いのが常である。ということは、英語の実力習得には教室での教科書だけで満足しては役に立たないということである。教室での長期にわたる精読も貴重だが、反面自主的な学習を通しての速読速解力の獲得がなければならない。近年「役に立つ英語」という言葉がよく聞かれるが、何が役に立つ英語であるかについては論議が分かるとしても、大学生にとっての英語はまず学習の場において役に立つものでなければならない。ここで何を読むべきかが問題になってくるのだが、これさえ読めばという、いわゆる「英語に強くなる本」なるものは数年前のベスト・セラーのタイトルを除いては存在しない。

戦前東京高師（現教育大）のある教授は夏の休暇に入る英語科1年生に中学で学んだ英語教科書を休暇中毎日時間をはかりながら読むことを求められたという。私も同じことをおすすめたのだが、大学生である諸君は今さら中学、高校の教科書でもあるまいと当然反撥するだろう。それならば、ladder edition と称する英米の文庫本を利用することをおすすめする。これは vocabulary の増大に比例して初心者クラスから段階的に編集されているし、洋書を読む楽しさも加わる。語学の悦びは一言一句をゆるがせにしない読みかたよりも先に、まず読解力の増大を、特にスピードの面で自覚されるところに始まるのではなからうか。これは Hearing, Speaking, Writing についても同じであろう。わが国では、英語に限らず外国語学習一般にこのへんの順序の逆転がつきまとっているように思われる。

■ 「経済学」をはじめて学ぶ人へ

平岡 規正 教授

経済学とは、時間や労働をふくめての稀少な資源を配分乃至利用する方法と方式を研究する学問である。

我々にとって、最も稀少な資源は時間である。まさに「時は金なり」であろう。受講の時間割りを作成するこ

とによって、諸君は「経済」の問題に、取りくむことになるのである。

経済学の研究領域は意外に広いので、経済学に対して、狭い先入観をもってもらいたくないが、セクショナリズムの強い日本では、経済学と経営学との間に、無理に境界線を引き、経済学をマルクス経済学と近代経済学とに分類し、学生間では「マル経」「近経」と略称されている。このような日本の慣行に従うと私は「近経」担当者であろうから、まずその「近経」の入門書を紹介してみる。

- (1)「近代経済学講座」（有斐閣出版）の第一巻
- (2)「現代経済学入門」（熊谷尚夫著、日本評論新社出版）
- (3)「現代経済学原論」（平岡、土屋、伊東、武野著、東洋経済新報社出版）の第一部と第二部

「近経」の学習には数学的訓練が要求されるので、そのための入門書をあげれば、

日経文庫の(4)「経済数学の手ほどき」(5)「統計学の手ほどき」などの気がるに読める本もあるが、(6)「経済理論の数学基礎」（日比野勇夫著、同文館出版）は必読の書であろうか。

■ 法 学

西山 雅明 講師

教養時代——この甘美な響きをもつ言葉は、希望にうちふるえながら未知の世界へ憧れる諸君の心を一層かきたてることでしょう。これからこの学院で送ることになる数年は、人格形成の途にある諸君にとって、まさに、のびきならぬ決定的な意義をもつことでしょう。いま私は、自分が丁度諸君と同じように大学に入学したばかりで、右も左も目に入るもの総てに胸をわくわくさせていた当時のことを思い出しながら、この小文を書いておきます。

そこで、法律という社会現象を解明することが法学の当面の任務であると私は考えるのですが、やはりその場合に、ひとつひとつの法律現象を丹念に追求することも大事なのですが、それと同時にそのような法律現象を人間ないし人間社会の全体像とよく結びつけて検討してゆくことも同様に大切であると感じております。

このようなことを考えながら、ほんの思いつくままに、二三の本の名を紹介しますが、それを手がかりに諸君が自力で一段一段と目的に近づかれることを祈ります。

- プラトン「ソクラテスの弁明」「クリトン」
ラートブルフ「法学入門」「フォイエルバッハ伝」
日本評論新社版「法律思想家評伝」

■ 新図書館の建築進む

昨年12月に着工された新図書館の建築は、その後順調に進捗し、次第に建物らしい格好を2号館の東側に見せはじめている。竣工は本年秋の予定である。

■ 私大助成金による図書の購入について

昭和42年度は、私大研究設備整備費補助金として文部省から267万円の助成があり次の研究図書が購入された。

Early English Text Society, Publications,
and other 2 sets.

Shakespeare Jahrbuch, and other 3 sets.

Voix et Images de France 1 set.

Harvard Law Review 1 set.

Personnel 1 set.

National Bureau of Economic Research,
Publications 1 set.

憲法調査会資料 他 1 set.

Survey of Current Business 1 set.

大蔵省主税局統計年報 1 set.

Zeitschrift für Betriebswirtschafts 1 set.

また昭和42年から文部省の補助が受けられるようになった私大理科等教育設備整備費補助金(学生用図書)として55万7千円の助成があり、「憲法判例の研究」他987点の学生用図書が購入された。

■ 学術雑誌総合目録

文部省では先般刊行した学術雑誌総合目録——人文科学欧文編——に引続いて和文編を刊行するため、その調査を全国の大学に依頼し、本学図書館もこれに協力して数千種に上る学術雑誌のカードを作成して提出した。最近、学術文献の量が飛躍的に増加しているため、研究者はこの検索に大きな労力を費しており、この総合目録は全国の大学・研究機関の文献所在状況を明らかにして、文献の相互協力体制を確立し、研究の促進を図ろうとするものである。

■ 寄贈図書

○福岡県より 福岡県の賃金事情 他2冊

○福岡市より 福岡市総合計画資料 他1冊

○厚生省より 国民健康保険事業年報 他1冊

○アジア財団より A History of Astronomy. 他9冊

○ロジャース夫人より An Outline of Ancient
Japanese Literature.

○川上太郎教授より 神戸大学雑誌目録 他1冊

○井上 忠教授より 日本封建都市研究 他5冊

○藤本典宣氏(68専—16)より

経済学大辞典 I～III巻

随 想

かつて、私の友人に、遊びに行くと、大抵四畳半の勉強部屋で大の字に悠然と横たわっている男があった。時には机に向かって読書をしていたが大体そういう姿で不気嫌に私を迎えることが多かった。その様は一見、怠け者の標本の如き感じさえ与えたものである。しかし、それでいて、その男は学校の成績もよく、物事をよく、深く、理解していた。当時の私は、彼が先天的に秀れた頭脳をもつ故に、人より少い時間で勉強を済してしまうのだらうぐらいに思っていた。しかし、その後、私はそれが先刻読んだ本の内容について、深い検討を加え、思索している姿であることを悟ることができた。

読書はたゞ漫然と本の字ヅラを読み下すことではないこと、云うまでもない。その内容をその総体的関連

において読みとり、自分のものに消化することである。その意味で読書の時間は「考える時間」を含まねばならない。

最近、学生の間では、ジャズ音楽を聞きながら本を読み、試験前ともなれば、図書の切り取りが横行し、教科書の盗難さえあると聞く。いかに騒々しい世相とは云え、いかにインスタントばやりの現今とは云え、これでは少し、図書の本来の意味を冒瀆しすぎはしないか。

山口 稻生

その人の体力、性格、或いは、その時と場所によつて、読書の型態は色々であろうが、何れにしても、精読し、考えながら読む時間と場所を大切にしたいものである。

(商学部助教授)